

世界の著名な特許にみる ————— 第36回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

藤岡市助 その6 帝国大学助教教授を辞し、民間企業へ

白熱電灯普及への意気込み

日本の電気事業のはじまりと急速拡大 - 東京電灯

日本初 白熱電灯導入 - 官報局 (印刷所)

日本初 民間への白熱電灯導入 - 大阪紡績

歌舞伎史上に残る天覧芝居での電灯利用



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士 (雅号)

大樹 七海

はじめに

本号から、2025年10月号から続く藤岡市助編の本編に戻ります。

まず前回までの流れを簡単に振り返ります。明治維新の立役者である長州ファイブの伊藤博文や山尾庸三の強い後押しにより、日本に近代科学産業を導入するため工部省が設立され、工部大学校の創立へとつながりました。(幕末～明治期の西洋技術導入や教育の流れは第29回を参照)

明治14年(1881年)、工部大学校電信科の3期生として卒業した24歳の藤岡市助は、すぐに工部七等技手に任命され、翌月には母校の教授補となり、教育者としての道を歩み始めます。そして26歳で助教授に昇進しました。(工部大学校出身の電気工学の先駆者た

ちについては第30回参照)

当時の慣習では、そのままアカデミアに残るのが一般的で、リスクを取って民間企業に飛び込んだり起業したりする例はほとんどありませんでした。しかし藤岡市助は、日本を守り、発展させるためには産業を育てることが不可欠だと考えていました。教壇で座学を教えるだけではなく、実学を重んじ、産官学すべての基盤をつくり、民間の現場で芽を育てていく必要があると感じていたのです。

その決意をさらに強めたのが、明治17年(1884年)の初めての欧米視察でした。フィラデルフィア万国電機博覧会で、電気が社会を変えつつある現場を目の当たりにし、さらにメンローパーク研究所でエジソンと直接会います。

日本人はエジソンを敬愛し、エジソンもま

た勤勉で誠実な日本人を好み親日家でした（エジソン編 第9回「親日家エジソンと日本人」を参照のこと）。

はるばるエジソンを訪ねてきた、同じ電信エンジニアの藤岡市助の覚悟も見抜き、こう助言しました。

「日本を電気の国にするのは素晴らしい。しかし、電気器具を輸入に頼っている国は滅びる。まずは自分たちで電気器具をつくり、自給自足の国にしなさい。」

この言葉は藤岡市助の胸に深く刻まれ、彼は強い決意を抱いて帰国します。エジソン37歳、やがて日本のエジソンと呼ばれる藤岡市助は27歳です。

本号では、帰国後の藤岡市助が、ついにアカデミアから産業界へと踏み出していく歩みと、その時代の日本の電力産業の発展をあわせて紹介していきます。

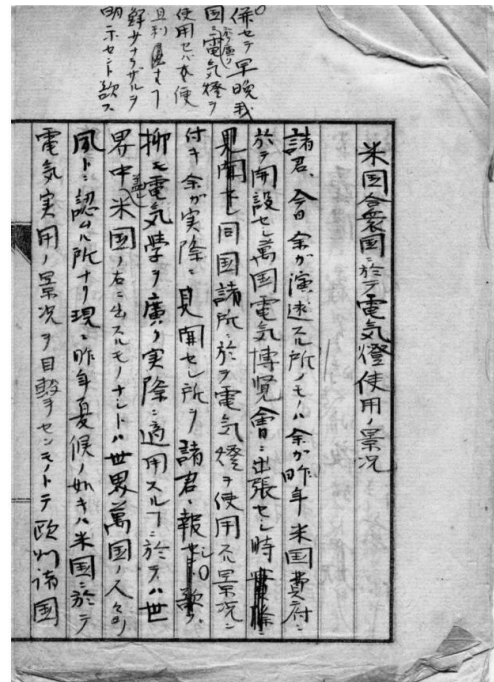
1. 白熱電灯事業の普及活動への意気込み

明治17年（1884年）米国フィラデルフィア万国電気博覧会で最新の電気事情を視察し、帰国した藤岡市助ですが、そもそも、1882年にエジソンが世界発の商用発電所としてニューヨークで中央発電所を稼働させたばかりの状況です（第31回 米国における電気事業の年表参照）

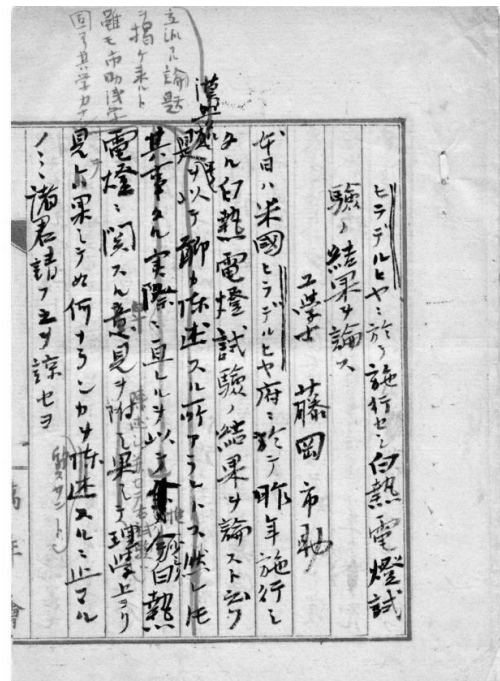
そして、明治15年頃の日本は、「瓦斯灯（ガス灯）はおろか石油ランプすら全国に行き渡らない頃とて電燈の光芒にまったく肝をつぶし」という状況です（東京電燈開業50年史）

そのため、藤岡市助は、市井のひとたちに、「電気」「電灯」という未知の技術を人々に理解してもらうため、人が集まる場所や出資者候補の前でデモンストレーションを繰り返し、電灯の可能性を広めていくことにしました。これは、エジソンが1879年に、メンローパーク研究所での初の白熱灯デモンストレーションを皮切りに、普及広報活動を行っていくようなイメージかもしれません。（第3回エジソン編「発明成功を発表した新年パーティー」参照）

帰国後、藤岡市助は明治18年（1885年）に講演を行い白熱電灯の技術を紹介します（下記資料参照）。



講演原稿「米国会衆国において電氣灯使用の景況」 出典元：藤岡市助関連資料 岩国学校教育資料館、岩国徴古館



講演原稿「講演原稿 ヒラデルヒヤニ於て施行セシ白熱電燈試験ノ結果ヲ論ス」 出典元：藤岡市助関連資料（資料館）岩国学校教育資料館、岩国徴古館